

ダンジョンで限界を超えるのは間違っているだろうか

らぐいん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

僕は認めない。自分に、人間に限界があるなんてことは。僕を馬鹿にしたすべての者たちを超えることによって、それを証明する。

タイトル変更しました。

(旧名) 不可能などありはしない

目次

プロローグ	1
第一話	6
第二話	12
第三話	17
第四話	22

## プロローグ

「やった・・・！やっただ」

思わずそう声が漏れてしまっていた。国立医学部を目指し、浪人生になり早3年が経過していた。別にどうしても医者になりたかったわけじゃない。ただ証明したかったただけだ、自分を馬鹿にしたやつらに、自分に不可能などないということ。

「うん、うん。受かったよ。・・・ありがとう、母さん」

ずっとあきらめろと言い、文句を言いつつも予備校に通わせてくれていた親に感謝を述べながらも、心はこれまでにない解放感と充実感に満たされている。ついにやってやったんだという優越感に浸り、これからのキャンパスライフに思いを馳せていた。

だからだろうか、その帰り道に猛スピードで迫りくる車に気付くことが出来なかったのは。気付いた時にはもう手遅れだった。目の前に迫る車に声を挙げる暇もなく、僕の身体は吹き飛ばされていた。

目を覚ました僕がまず見たものは、薄汚い天井だった。寝起きだからだろうか、頭の中がはつきりしない。自分に掛かっている布団を確認し、ベッドに寝ているのだと分かった。辺りを見回してみると一人の女の子が椅子に座りこちらを眺めていた。

「どうやら目が覚めたようだね、気分はどうだい？」

女の子は笑いながら話しかけてきた。年は14歳くらいだろうか。少女からは今まで感じたことのないような不思議な気配を感じる。顔立ちから見るに外国人のようだが、幸い日本語は流暢のようだ。英語はある程度読むことはできるが、話すことはできないので助かった。

「えっと・・・ここはどこで、君は誰だい？僕は確か、合格発表を見に行つて、それから・・・」

そこで僕はとっさに自分の身体に手を這わした。ない、ない。どこにも怪我がなかった。あれだけの速度で撥ねられたにもかかわらず。あれだけ身体が吹き飛んだにもかかわらず、だ。自分の身体に感覚を

向けてみても特にこれといった痛みを感じることはなかった。まさかあれは夢だったのだろうか、なら一体どこからが夢だったんだ？あの合格自体が夢だったのか？

「ここは昔教会だったところだよ。今はボクが住まわせてもらってるんだ。ボクの名前はヘステイア。教会の前で倒れてる君をわざわざ運んできて、寝かせてあげたのはボクなんだぜ？感謝してくれよ」

と、女の子は得意げに言った。倒れていたとはどういうことだろうか。もし倒れていたのだとしても、救急車を呼ばなかったことには何か理由があるのだろうか。それに、ヘステイアという名前には聞き覚えがあった。だが、考えるのは後にして、兎に角今はお礼を言うことが先決か。

「どうやら危ないところを助けてもらったみたいで、どうもありがとう。ここは〇〇市のどこ辺りだろうか。少し記憶が曖昧でうまく思い出せないんだ」

僕がそう言うと、女の子は不思議な顔をしてつぶやいた。

「〇〇市？聞いたことのない地名だね。ここは迷宮都市オラリオだよ」

・・・迷宮都市？オラリオ？この子は一体何を言っているんだろうか。日本、いや現実世界に迷宮なんてあるわけがないし、オラリオなんて町の名前も僕は聞いたことがない。そこで僕はあることに気が付いた。ああ、何だ。そういうことか。

「くくっ。悪いが君の冗談ではなく本当のことを教えてほしい。君のヘステイアという名前も確か、ギリシヤ神話かどつかの女神の名前だったよね？昔したゲームで見たことがあるよ。良ければ本当の名前も教えてくれないかな」

「冗談なんて何一つ言っていないさ。間違いなくここは迷宮都市オラリオであり、ボクは君の知っている女神のヘステイアだよ。君も感じているはずだ、ボクが普通の人間でないことは」

・・・は？このお子様は一体何を言っているのだろうか。いや、待てよ。この子の言っているのは、さつき僕の感じた不思議な気配のことだろうか。なら本当にこの子は神ということになるのだろうか。

いや、決めつけるのはまだ早い。何か決定的な証拠がないと。

「君から不思議な気配を感じたことは確かに認める。だが、どうしても君が神だということ信じることが出来ない。何か神である証拠のようなものはないだろうか」

「不思議なことを言うね、君は。神なんてここじゃ珍しくもなんともないだろうに。だが、そうだな。どうしてもというなら一つ証明する手段があるよ。ボクたち神に嘘をつくことはできないんだ。それで確かめてみてはどうだい？」

神が珍しくない？ここには神が何十人もいたりするのだろうか。悪い冗談だ。しかし嘘が通じない、か。単純だがわかりやすくはある。

「わかった。今からいくつか自分のことを話す。それが嘘かどうか当ててみてくれ。すべて当てたのならとりあえず君のことを信じてみるよ」

「どんとこいだよ！」

何故か胸を張っている少女。というか胸でかいな。こんな体型見たことないぞ。

「僕の生まれはアメリカだ」

「嘘だね」

即答された。まあ、普通にわかることだろうが、少し位悩んでもいい気もする。続けていってみるか。

「僕の父親は弁護士だ」

「嘘だね」

「僕は昔野球部に入っていた」

「嘘だね」

「僕はアルバイトをしたことがある」

「嘘だね」

「・・・僕はまだ童貞だ」

「本当だよ」

「・・・」

「つて！君はなんてことを言ってるんだい！これは立派なセクハラだ

よ！」

彼女は顔を真っ赤にして叫んだ。それはともかく、質問に関しては全問正解だった。実際僕のことを知らなければ当てられない問題のはずだ。最後の質問にいたってはおそらく意味を理解する前に、それが嘘か本当かを見抜いたような反応だった。いやいや、童貞ちやうわ！・・・童貞だけど。

だが、それならば彼女が本当に神ということになる。もし、そうだとすると、一つの考えが頭の中に浮かんでくる。それは先ほど夢と決めつけ、必死に考えないようにはしていたこと。聞くのが怖い、怖いが、聞かなければ自分の現状を正しく認識することはできないだろう。

「全問正解だ。いったん君のことは信じておこなすよ。いや、あなたが神だというならば、この話し方は失礼ですね。これからは敬語で話すことにします。これまでの無礼をお許しくください」

「話し方についてはあまり気を使うことはないけど、君の好きなようにするといいいよ。それで、ボクのことを信じたうえで何か聞きたいことはあるかな？」

「はい。僕から聞きたいことはただ一つです。・・・ここは死後の世界でしょうか」

「はい？」

彼女はきよとした顔でこちらを見ている。何かおかしなことを言っただろうか。現実世界でないとするならば、僕は車に轢かれて死にそのまま死後の世界にきたとしか考えられないのだが。そう思っていると、彼女はこれまでにない真剣な表情で口を開いた。

「どうやら君は大きな勘違いをしているようだ。いや、違うな。ボクと君との間の常識が大きく食い違っていると言ったほうがいいか。いいかい？これからボクは、この世界とこの街についてのことを話す。何か聞きたいことがあってもとりあえず最後まで聞いて欲しい。そのうえで、今の君が何者なのかを考えてみてくれ」

・・・話はこうだった。今から1000年前、暇を持て余した神が天界より降り立った。そして、下界の住人に「神の恩恵」<sup>ファルナ</sup>を与え、下界住人は脅威的な成長をすることが可能になった。この街オラリオ

はこの世界で唯一ダンジョンを有する迷宮都市。神の恩恵を受けた下界の住人は己の成長のためにダンジョンに潜り生活している。と。

ちよつと待ってくれよ。一体何のゲーム世界だよ、ここは。だが今の言葉を信じ、僕が車に轢かれて死んだのだと仮定するなら。導かれる答えはただ一つ。

「ここは・・・異世界なのか？」



## 第一話

「ここは・・・異世界なのか?」

そうつぶやきそれを確信したとき、僕はとてつもない吐き気に襲われた。僕がとつさに口を押えうずくまるとヘステイア様が慌てたように声をかけてきた。

「だ、大丈夫かい?!ちよつと待ってておくれ」

彼女がそう言い椅子から立ち上がると急いで何かを取りに行つた。すぐに帰ってきた彼女は手に持ったバケツを僕に渡してきた。

「きついなら、無理せず全部ここに出すといい」

「うっ・・・ありがとうございます。おえっ、おええええ!」

そう言いながら、彼女は優しく背中を撫でてくれた。僕のだしたものは、ほとんど胃液のみだった。まるで何日も何も食べていないかのように。このことがまた僕の考えを確かなものにする。そう、すべては無駄だったのだ。医学部に入るためにやってきたあの勉強は。時間。覚悟は。すべて無駄だったのだ。僕は、僕を馬鹿にしたあいつらに、何の報復をすることなく死んでしまったのだから。そう思うとまた吐き気がしたが、もう何も出てくる気はしなかった。

「落ち着いたかい?落ち着いたのなら、まずは君の名前をボクに教えてくれないかい?」

そう彼女は僕に問いかけてきた。

そういえばそうだった。僕はまだ自分の名前すら言っていないのだ。そのことを疑問に思わないほどに、僕は混乱していたということだろう。

「僕の名前は・・・」

とつさに名前を言おうとした僕だったが、あることに気付いて思わず口を閉じていた。それは、罪悪感だ。何の恩返しも出来ず、早々に死んでしまった僕が、家族の名を名乗ってもよいのだろうか、と。考え出すと止まらなくなるのは僕の悪い癖だ。でも、やはり。考えれば考えるほどに、今の僕に名乗る資格はないように思えた。

「僕の名前はミノルです。苗字はありません。好きに呼んで下さい」

僕の嘘がわかったのだろうか。それとも、僕が苦悩していることに気づいたのか。ヘステイア様もが一瞬つらそうな顔をしたが、すぐに笑顔になって僕に話しかけてきた。

「ミノル君か、いい名前だね。ではミノル君。今度はゆっくりでいい、君のことを僕に話してくれないか。今の君はひどい顔をしているからね。話せば楽になることもあると思うよ」

そう言い笑う彼女は、僕の目には紛れもない女神に映った。その後、ゆっくりと自分のことを語った。自分の世界に神がいないこと。ダンジョンがないこと。自分が極々平凡な家庭に生まれ、これまで生活してきたこと。挫折し、それでもあきらめずに頑張り、夢が叶ったところであっさり死んでしまったこと。

僕の話を実剣に聞いてくれていたヘステイア様は、最初僕の話に驚きつつも、納得ができたという表情で僕に話しかけてきた。

「なるほどね。やっと今までの会話で謎だったことがわかったよ。君は異世界から来た、というんだね？ただ、君の話聞いていて、少しおかしいと思ったことがあるのだけれど、いいかい？」

「はい。为什么呢？」

「君は今、何歳なんだい？」

「？21歳ですが、それがどうかしましたか？」

「いや、ボクにはどうしても君が13、14歳ぐらいにしか見えないのだけれど・・・君は物凄く童顔なのかい？」

「そんなはずは・・・すみません、手鏡を貸してもらえますか？」

ヘステイア様の質問に疑問を抱きつつも、彼女が持ってきた手鏡を受け取り、自分の顔を確認する。そして僕は驚きのあまり、身体を硬直させてしまった。本当だった。丁度中学生くらいの時の自分がそこには映っていた。顔に手を当てて確認してみても、まだ比較的やわらかい髭が指をかすめた。そうか、声変りが比較的早かったから、今まで違和感を抱けなかったのか。僕は、少し声を震わせながら言った。

「どうやら、本当に若返っているようです。間違えありません」

僕の言葉に、ヘステイア様もかなり驚いているようだ。当たり前前

だ、過ぎ去った時間が戻らない、それはこの世界でも変わることもない確かなものだろう。14歳の頃ということは、身長もかなり低くなってきているだろうな、等とどこか現実逃避のような思考に僕は陥っていたが、次のヘステイア様の言葉により、現実に引き戻されることになった。

「死んだはずのミノル君が何故、この世界に飛ばされたのか。何故若返っているのか。疑問は多々あるけれど、今は君のこれからのことを考えようか。君はこれから一体どうするつもりだい？」

その通りだった。ここが異世界というならば、僕にとつてここは完全にアウエーだと言える。養ってくれる家族もいなければ、帰るべき家もない。先立つものが何も無い状態で、働いたこともないガキがどうやって生活をしていけばよいのだろうか。働かなければならないということとはわかるが、そうするためには、僕はこの世界のことを知らなすぎる。だが、ヘステイア様が神というのであれば・・・

「無理を承知でヘステイア様をお願いします。僕に神フアルナの恩恵を授けてはもらえないでしょうか」

僕の言葉を聞いてヘステイア様は押し黙ってしまった。当たり前だ、神の恩恵を授けることにどのような意味があるのかはわからないが、僕のような見ず知らずの他人に与える義理はないだろう。だが、僕の予想に反して彼女は少し悲しそうな顔をしてつぶやいた。

「そう言ってくれるのは嬉しいよ。でもボクのファミリアには眷属が一人もいないんだ。ああ、ファミリアというのは神の恩恵を受けたものが入る組織のことだよ。だから、君がボクのファミリアに入ってくれてもかなりの苦勞を掛けることになると思う」

と、悲しげに言った。ただ、僕は眷属が一人もいないということよりも、彼女が僕のことを考えてくれていること方に驚きを隠せなかった。そして、この女神の眷属になりたいという思いが僕の口を動かしていた。

「お願いします。この世界で僕の事情を知っているのはあなただけです。それに僕は、見ず知らずの人間にここまで優しくしてくれたあなたの眷属になりたいと思いました。何も無い僕ではありませんが、どう

かあなたのファミリアに加えてください」

僕の話しながら頭を下げていた。ヘステイア様の眷属になりたいたいと思っただのは事実だ。だが、それと同時にここで断られたら本当に路頭に迷ってしまうという恐怖が僕の心に渦巻いていた。

僕の話の聞き、とても嬉しそうな顔をしたかと思つたら、次いでハツとした顔をした。その顔を眺めながら、本当に表情豊かな神だな。なんてことを思った。

「うん、わかつたよ。君をボクのファミリアに加え、君を眷属かぞくとして迎え入れよう。改めまして、ボクはこのヘステイア・ファミリアの主神のヘステイアだよ。これからよろしくね」

その僕を受け入れてくれた言葉に、感謝と安堵の混ざつたような気持ちがあふれてきた。

「ありがとうございます。僕はミノルです。これからよろしくお願ひします」

ヘステイア様は嬉しそうにうんうんと頷くと、すぐに真剣な顔を作つた。

「いいかい？ミノル君。これからは君の素性は誰にも言うてはいけな  
いよ。ボクは異世界なんて聞いたことがなかった。他の神もおそらく同様だろう。この世界の神達は娯楽に飢えているからね。バレタとたん君は神達の玩具にされてしまうだろうさ。まあもつとも、ボクはそんなことはさせる気はもうとうないがね！」

「はい、わかりました。これは二人だけの秘密、ということですね」

僕が嬉しそうに笑つて言うと、ヘステイア様は少し顔を赤くしながら頷いた。どうやら照れているようだ。かわいい。

ヘステイア様は赤くなつた顔をごまかすように、早口でまくし立てた。

「じゃあ、さっさと神の恩恵を刻んでしまおう！善は急げというからね！服を脱いでうつ伏せになつてくれたまえ！」

どうやら神の恩恵は背中側に刻むものようだ。でも刻むつてどうゆうことだろうか。痛いのは勘弁してほしいところだが。そう思いながらもシャツを脱ぎ、ズボンを脱ごうとしたところで待つたがか

かった。

「下は大丈夫だよ！シャツだけでいい！」

ヘステイア様はさつき以上に顔を真っ赤にしていた。

「それじゃ始めるよ。楽にしててくれ。」

そう言うと、彼女は僕の背中に指を這わせてきた。何かを書いているような感覚だ。少しの間その感覚に身を任せていると彼女の指が離れていく。どうやら終わったようだ。思っていたよりもかなりあっけなかった。身体に変化があるようにも思えない。

僕の背中を見ながら、ヘステイア様は何かを紙に書き写している。書いている途中一瞬手が止まるが、すぐに再開してまた書き始めた。というか、あの紙は僕に見せるんだらうけど、文字を読むことができらるだろうか。

「終わったよ。これで君はボクの眷属だ。これは君のステイタスだよ」

そう言いつつ先ほどの紙を渡してきた。その紙にはこう書いてあった。

ミノル

L v . 1

力：I 0

耐久：I 0

器用：I 0

敏捷：I 0

魔力：I 0

《魔法》

【ブースト】

・ 詠唱式【上昇せよ】

《スキル》

【努力よ実れ】  
エボリ・ユーシヨン・セオリ

・ 経験値取得効率の上昇

・ 器を超えた成長を可能とする

よかった、なぜか知らないが日本語だ。しかしステイタスとは…。

本当にゲームの世界のようだ。意味はなんとなくわかるので上から見ていく。自分に魔法があるのには驚いたが、それ以上にスキルを見て僕は顔をしかめた。器を超えた成長を可能とする。つまり、自分には限界がある、ということの証明に他ならない。いや、正確にはあった、か。すべてを失った今、自分が最も欲しかったものを手に入れるとは、なんて皮肉なことだろうか。

感慨にふけっていると、ヘステイア様が話しかけてきた。

「見て分かる通り、君には魔法とスキルがある。君にはよくわからな  
いだろうが、これはもの凄いことなんだ。しかも魔法は超短文詠唱。  
スキルは見たことも聞いたこともないレアスキルときている。ボク  
は今日君に驚かされっぱなしだよ」

呆れたように彼女は言った。しかしこれはすごいことなのか。他  
を全く知らないせいで実感はない。

「異世界人、というのが関係してるんでしょうか」

「可能性はあると思う。だけど前例がないことだからね、はっきりし  
たことは言えない。ただ一つ言えるのは、このスキルに関しては誰に  
も言っではいけないということだ。これも二人だけの秘密だ。それ  
を約束して欲しい」

今度は赤くならず、真剣な顔で言ってきた。ヘステイア様の言葉  
は間違いなく僕を思っただことだろう。そう思うとどうしよもなく  
うれしくなってしまう。

「はい。約束は必ず守ります」

と力強く言った。そのすぐ後、安心してしまったせいだろうか、大  
きなお腹の音が部屋に響いた。今度は僕が真っ赤になっとうつむい  
た。

ヘステイア様は心底可笑しそうに笑いながら、

「今日は君に出会って、君が眷属になった記念日だ。少し贅沢をして  
ご馳走をいっぱい食べよう。今夜は寝かさないぜ?」

と悪戯っぽく微笑むのだった。

## 第二話

「おはよう！いい朝だね！」

「おはようございます。ヘステイア様」

晴れてヘステイア・ファミリアに入ることになった僕は、この世界初めての朝を迎えた。

ヘステイア様は朝から元氣だ。

「運のいいことに、今日バイトが休みなんだ。今日は君の仕事について話したら、一緒に買い物に行こう！」

仕事、いきなり仕事だ。わかつてはいたがやはり気後れしてしまふ。労働して金を稼ぐなんてもう少し先だと思つてた。

「僕がすぐできる仕事なんて、見つかるでしょうか」

「そこは大丈夫だよ。ミノル君には冒険者になって、ダンジョンに行つてもらおうと思つてるんだ」

ダンジョン。この街だけにあるという迷宮か。確か中のモンスターを倒して、そのモンスターから魔石を取り出して稼ぐんだっただか。

だが少し待つてほしいと思つてしまふ。

「すみません。ヘステイア様。実は僕、モンスターどころか動物一匹すら殺したことがないんです。そんな僕が、モンスターを倒せるとは思えません」

「うん。不安なのは確かにわかる。本当はボクだつて、ミノル君に危険なことはさせたくないんだ。だけど君にはとてもない才能がある。それは神であるボクが保証するよ」

「ですが・・・」

それでも言い淀んでしまふ。選択できるような立場でないことはわかつていたつもりなのに。

「それに、ボクは君にはダンジョンが向いていると思うよ。昨日の話を聞く限り、君にはとても高い向上心がある。君の成長のためにはダンジョンに潜るのが一番効率がいいんだ」

そこまで言われると、できるような気がするから不思議だ。それに成長のため、か。今までは勉強をしても、それで本当に力がついているのか不安なことが多々あった。だが、今はそれを目で見て確認できる。それを考えるとすごく魅力的な気がする。

実は冒険者という響きには引かれるものもある。しようがないよね。

「わかり……ました。確かにこのままじゃ、ただのごくつぶしですもんね。ただ、武器とかどうしましょうか。そういうのは凄く高そうないメージなのですが」

「ふっふっふ。よくぞ聞いてくれた！実はいつ眷属ができてもいいように、1万ヴアリスも貯金があるのだよ！」

「どうだい。褒めてもいいんだよ。と言わんばかりに大きな胸を張っているヘステイア様。」

その姿をもう少し見ていたい気もするが、言わなければならぬことがある。僕はできるだけ申し訳なきような顔を作って言う。

「すみませんヘステイア様。僕には1万ヴアリスがどのくらいの価値かわからないんです……」

僕がそう言うと、ヘステイア様は見るからに残念そうな顔をした後、説明をしてくれた。

「うん、そういえばそうだったね。えっと、ボクがアルバイトで売ってるじゃが丸君というスナックがあるんだけど、それが大体40ヴアリスだよ。後は、酒場の高めの定食が300ヴアリスってところかな。これで大体わかるかい？」

「うーんと、露天で売ってるスナックが40ヴアリスか、日本だと200円くらいか？ちよつと安いかな？でもそれで計算すると定食が1500円ってことになる。こっちは高い気がする。まあ全部の値段が同じくらいという保証もないし、大体4〜5倍が日本円って考えていいかな。合ってはいなくても大きく外れてはない、と思う。じゃあ貯金が1万ヴアリスってことは、大体5万くらいか。正直反応に困る額だが……」

チラッとヘステイア様を見る。誇らしげだ。此処は凄く驚いてお



こう。そうしよう。

「大体わかりました。一人で1万ヴァリスも溜めるなんて凄いです。僕は感動しました！」

笑顔でそう言う。だが僕の予想とは裏腹に、すごく不満そうな顔だ。どうしたのだろうか。

僕が答えにたどり着く前に答えが出てきた。

「ミノル君、今嘘をついたね！ボクにはわかるんだよ！」

あ、完全に忘れていた。

あの後、何とかヘスティア様の機嫌を直し、僕たちは買い物に出かけた。

始めて教会を出た僕の感想は、異世界すごい！とかじゃなく、うわこの教会ボロ過ぎだろ、だった。なんか残念だ。街並みの感想としては、ファンタジーの世界観に合った中世のヨーロッパ風といったところだ。後は、すごい高い塔が立っている。あそこにダンジョンがあるのだろう。電気などはやはり通っていないらしい。

「まずは、武器と防具を買いに行こうか！やはり冒険者にとっては最重要品だからね。いいものを買わないと。ミノル君は使いたい武器はあるかい？」

「そうですね。何も使ったことないのでよくわかりませんが、やはり剣は使ってみたいですかね。後は、リーチの長い槍とかですかね」「いいね！ミノル君も男の子だからね！かつこいい武器を使わなきゃ！」

それにしてもこの神様ノリノリである。よほど眷属ができたことがうれしいのだろう。っと、どうやら店に着いたようだ。自分の身を守るものだ、真剣に選ばないと。そんなことを思いながら、僕とヘスティア様は店の中に入っていった。

「うー、まさかあんなに高いなんて・・・情けない神様でござめんよ・・・」

「大丈夫ですよへステイア様！ちゃんとナイフと防具を買うことはできたんですから！」

なるべく明るい声で僕は言う。ナイフは3600ヴァリス、防具は5000ヴァリス。これから僕の生活必需品を買うとなるとギリギリの値段だ。買っただけでも良かったと思うべきだろう。

「これで明日からはバンバン稼ぎますから！・・・稼げるかな？いや、稼いで見せます！任せといてください！」

「うう、こんな頼れる眷属を持てるなんてボクは幸せ者だよ」

なんて大げさなことをへステイア様は言う。やばい、自分からハードルを上げてしまったと後悔もした。が、それ以上にこの神様の幸せそうな顔を見たいと思った。

「じゃあ、気を取り直して、次の店に行きましょう！」

「おー！」

「あれは、一体・・・」

バベルの最上階から街を眺めていたフレイヤは思わずつぶやいていた。あの魂はこの距離からでもわかるほどに異常で、異質だった。別にきれいな色をしていたわけではない。普段なら気にも留めない、雑草と同じような魂。だが、あの魂は間違いなく、光を放っていた。見ていると、どうしようもなく引き込まれそうになる。そんな淡い光を。

これまでの神生で、あんなものは見たことがない。聞いたこともない。

「フレイヤ様、どうかなされましたか？」

そばに仕えていたオツタルが話しかけてくる。

「あら？どうしてかしら？」

「いえ、とてもうれしそうな顔をしてらしたので」

どうやら知らず知らずのうちに顔が笑っていたようだ。だが、それも仕方のないところだろう。ここまで興奮したのは、いつ以来だろうか。まるで、新しい玩具を手に入れた子供のようだと思いつつながら、光

の消えた先をずっと見ていた。

### 第三話

「ちゃんとナイフは持ったかい？忘れ物は無いかい？」

「はい、大丈夫ですよ」

その姿に僕は思わず苦笑してしまう。まるで始めてお遣いに行く子供のような扱いである。

・・・そういえば受験の朝は、母親も毎回こんな感じだったと思いつ出す。

「ど、どうかしたのかい!?もしかしてお腹を壊してしまっただんじや?!」  
気持ちが悪く表情に出てしまっていたのだろうか、ヘステイア様が心配そうな顔で聞いてくる。

「いえ、少し母親のことを思い出してしまいました」

それを聞くと、ヘステイア様はつらそうな表情をする。本当に優しい神様だ。

「・・・ミノル君は、自分の世界に帰りたいと思わないのかい？」

ヘステイア様の言葉に僕は声を詰まらせた。それは、とても聞きづらいことだっただろう。この神様は、眷属ことどもが出来てあんなに嬉しそうだったのだから。それに、この世界に来て僕もずっと考えていたことだ。もう、僕の答えは出てしまっている。嘘偽りのない考えを彼女に伝えよう。

「はい、とても帰りたいです」

「・・・」

「でも、帰る気はこれっぽっちもありません」

「え?どういうことだい?」

ヘステイア様は僕の言葉に困惑している。そりゃそうだ、僕だってこんなことを言われたら混乱するだろう。

「僕は向こうの世界で死にました。僕の中でこれは確かな事実なんです。今更帰っても向こう人たちに合わず顔がありません。僕がいても迷惑をかけるだけでしようし。」

それに、今はこんな姿ですしね、と冗談っぽく笑って言う。だが、へ

ステイア様はあまり納得がいつていないようだ。怒ったように言ってくる。

「例えそうだとしても！ここには君の家族も！友達も！恋人もないんだよ！君のことを知っている人は誰一人いないんだ！そんな場所で君は笑って生きていけるのかい！」

いつの間にかヘステイア様は泣いていた。泣きながら、叫んでいた。きつとこれはヘステイア様の本心で、本気で僕のことを心配してくれているのだろう。本当に・・・敵わない。

「それでも・・・それでも、僕にはこの世界で家族が出来ました。僕のために、こんなに泣いてくれる家族が出来ました」

彼女は、ぽろぽろ泣きながら驚いた顔をしている。その顔を真つすぐに見つめながら言う。

「友達も恋人もこれからいくらでも作れます。あなたがいれば笑っていられます。それになにより・・・」

「なにより・・・？」

彼女の手を取り、につこり笑いながら僕は言う。

「僕は今、生きてますから」

ヘステイア様はぶるぶる震えている。どうしたのだろうか。まだ怒っているのだろうか。手を放したほうがいいだろうか。そう思っている、ヘステイア様は急に飛びついてきて、僕はそのまま押し倒された。

「君はあ！君ってやつはあ！そんなことを言ってボクを泣かすとは。この、悪い奴め！」

「ちよつ！ヘステイア様！やわらかい！それに重い！」

その後ヘステイア様が落ち着いた時には、かなりの時間が経過していた。なんだか朝からすごく疲れてしまった。そういえば僕、これからダンジョンに行くんだよな・・・

先ほど泣いたのがよっぽど恥ずかしかったのか、ヘステイア様はさつきから顔を赤くして下を向いていた。だが、急に顔をバっと上げると、食い気味に言ってきた。

「ミノル君、ちよつといいかい！」

「はい、何ですか」

「さつきはああ言っただけだね。友達を作るのはいいけど、恋人を作るのはボクはどおかと思うよ」

「はあ・・・え？急にどうしたんですか」

「と・に・か・く！勝手に恋人なんか作っちゃダメだからね！君はボクの、たった一人のファミリアなんだから」

と最後は嬉しそうに言ってくる。その顔を見ていると、多少の疑問も「まあ、いいか」と思う僕であった。

「それじゃあ、今度こそ行ってきます」

「うん。気を付けてね」

そう言つて、手を振つて送り出してくれたヘステイア様を背に、僕は満を持してダンジョンへと向かった。ダンジョンへは前にも見たあの高い塔、バベルへと向かつて歩いていく。ちゃんと道を確認しながら歩いていく。もし道に迷ってしまったら、帰還はかなり困難なものとなってしまふだろう。

前街を歩いているときも思ったが、バベルに向かうにつれて人も店も増えてくる。迷宮都市というだけあって、ダンジョンを中心に栄えているようだ。獣人？というのだろうか。動物の耳や尻尾を生やしている人も何人か見かけた。やはり、ファンタジーの世界なのだと改めて思う。

「ふう、やっと着いた」

近くで見るとやはりでかい。最上階は50階層で、そこに人が住んでいるというのだから驚きだ。僕だったら絶対そんなとこ住みたくない。こんな高い塔、いつ倒壊してもおかしくないと思ってしまう。いや、ここは地震が少ないのかもしれない、と適当なことを考える。

ここからの手順はヘステイア様から聞いている。まず、ギルドに行つて登録をしないといけない。そこでは、ファミリアに属しているかどうかの確認と、ダンジョンに入るうえでのアドバイスをしてくれるそうだ。アドバイスは助かる、正直今も不安でいっぱいだ。

ギルドにきてまず思ったことは、意外と人が少ない。ギルドは魔石の買い取りなどが主な仕事だとヘスティア様は言っていた。朝方はいつもこんなものなのかも知れない。受付を見ると、いつくか空いているところがあるのでそこに入っていく。やはり、どこの世界に行っても、受付は女性が多いようだ。

「おはようございます。ダンジョンに入りたいので、登録をお願いしますたいんですが」

「はい、おはようございます。まずはお名前と所属ファミリアを伺ってよろしいですか」

きれいな人だ。耳がとがっているからエルフだろうか。神、獣人としてエルフだ。ファンタジーの世界は凄い。

「私の名前はミノルと申します。所属ファミリアはヘスティア・ファミリアです」

「ミノル君に、ヘスティア・ファミリアですね。確かに、登録完了しました」

そう言う彼女が真面目な顔を崩して言う。

「改めまして、ようこそダンジョンへ。これからあなたの担当アドバイザーをするエイナ・チュールです。よろしくね」

「こちらこそ、よろしく願います。ミノルです。わからないことだらけなので、質問等が多くなってしまったらすみません」

「いえ、わからないことがあったらどんどん聞いてください。それが私の仕事ですし、死なないために一番重要なことですから」

と、何事もないように言ってくる。わかつてはいたが、この仕事が生と隣合わせであることを実感する。不安になる心を何とか奮い立たせる。

「まず初めにダンジョンにおける注意点や、モンスターと対峙したときどのように対処すればよいかなどを教えていきます。どれも大切なことばかりですから。しっかり聞いて覚えてくださいね」

「はい、覚えるのは得意なんです。よろしく願います」

その後、彼女の講義をトイレ休憩など挟んでみっちり3時間ほど聞いた。終わった後、彼女は驚いていた。普段は1時間もすれば皆根をあげて逃げていくそうさ。そりゃそうだろうと思う。僕だって3時間も集中するのはつらいのだ。自分から冒険者になるような奴らが、そんな時間集中していられるとは、僕にはとても思えなかった。ただ、彼女なりに冒険者に死んで欲しくないという思いは伝わってきた。でなければ、あんな長い講義をすることはできないだろう。

彼女は最後にこう言って締めくくった。

「冒険者にとつて一番大事なのは、冒険しないことです。それをしっかり覚えておいてください」

「はい、長々とありがとうございました」

冒険者は冒険しちやいけない、か。言いたいことはわかるけど……それってもう冒険する者とは言わないんじゃないかな……なんてことを僕は思った。



## 第四話

無事エイナさんの講義を終えダンジョン1階層に降りている最中、これから戦うモンスターのことを考えながら、昨日の夜のヘステイア様との会話を思い出していた。

ヘステイア様との買い物から帰り、晩御飯を食べ終えた後のことだ。

「明日はさっそくダンジョンに行くわけだけど、その前に君の魔法を実際に使ってみておこうか」

「魔法を……ですか？僕も使ってみたいですけど、こんなところで使っていいんですかね」

「確かに初めての魔法をここで使うのは危ない気もするけど……君の魔法は明らかに攻撃系ではないしね。恐らくはステイタスアップ系だろう。ダンジョンに潜る前に、自分の魔法の発動条件や発動タイミングを知っておくのは重要さ。ダンジョンでは少しの隙が命取りになるからね」

言われてみれば確かにそうだ。僕の中では詠唱を唱えて魔法を発動すれば、勝手に効果が現れるものだというイメージだった。だが、使うのに魔力とかをコントロールしなくてはならないかもしれないし、物凄く集中しなくはいけないのかもしれない。そういうことを知らずにダンジョンに行き、初めての戦闘で魔法の発動が失敗してしまったら、おそらく僕はパニックになってしまうだろう。その隙は致命的とさえいえる。

「まあ、色々考えるのは後にして、とにかく一度使ってみよう。話はそれからさ」

ヘステイア様の言葉にうなずきで返し、頭の中に詠唱式と魔法を思い浮かべる。

「上昇せよ」「ブースト」

初めて使った魔法の感想としては……すごい地味だということ

だ。身体の外側が変わったところは何も無い。内側に意識を向けてみると、少し身体が火照っているような感じだろうか、力が溢れてくるような感覚だ。

「無事発動したみたいです」

「え?!もう発動してるのかい?!もつと全身がピカー!つて光つたりとかしないのかい?!」

ヘステイア様は物凄く残念そうな表情を浮かべていた。僕だって残念だ。初めて使う魔法はもつと派手なのがよかった。もつとこう・・・魔法陣とか出したかった。

「出ないものはいしうがないうでしう。僕のほうが悲しいんですからね・・・。じゃあ、少し身体を動かしてから解除してみますね」

そう言い、僕はその場でジャンプを試してみたり、腕立て伏せを試してみたりした。「ブースト」の効果は思ったよりもすぐく、軽く力を入れただけで、その辺のバスケットボールの選手より高く跳ぶことが出来た。また、腕立て伏せを30回しても全然疲れなかった。前ならありえなかったことだ。心の中で【解除】と強く思うと魔法が解ける感覚に襲われる。これは別に声に出さなくてもいいようだ。最初の【解除】という単語で成功したことから、おそらく、【魔法を解く】というイメージさえあれば、言葉はなんでもいいのだと思われる。

僕の様子から、魔法が解けたことを察したのだろうヘステイア様が話しかけてくる。

「どうやら上手くいったようだね。なら次は、そうだね。足踏みでもしながら、魔法を使ってみてくれるかい?」

足踏み?それをするに何か意味があるのだろうか?少し疑問に思いつつも言われたとおりにやってみる。

「【上昇せよ】【ブースト】」

詠唱を終えると魔法が発動・・・してない?なんでだ。

「どうやら発動しなかったみたいだね。魔法というのは高い集中力を必要とするらしいんだ。動きながら、戦闘しながらの詠唱は【平行詠唱】と言われる高等技術になるんだ」

「なるほど・・・動きながら詠唱できないのは一人の僕には少し厳しい

ですね」

深刻そうに言う僕に対して、ヘスティア様はいう。

「まあでも、それは一般的な魔法の場合の話さ。普通魔法っていうのは、もつともつと詠唱の長いものなんだ。その詠唱を最後まで言う間集中しなきゃいけないからこそ難しいのさ。でも、君の『ブースト』は詠唱がとても短い。多分だけど、慣れさえすれば普通にできるようになると思うよ」

その言葉に多少の安堵を覚える。少し練習すれば身につくのであればやらなくてない。まあ、1日2日で身につくものでもないだろうが。

「あと注意する点は・・・ああ、そうだった。魔法の使い過ぎには注意するんだよ。魔法を使用しすぎると精神<sup>マインド</sup>疲弊ダウンになってしまふからね。そうなるダンジョン内で気絶することになる。ま、そう簡単にならないと思うけどね」

「それは怖いですね・・・。ありがとうございます。明日は今できる精一杯を試してみます」

僕がそういうと、ヘスティア様は嬉しそうにした。

「うん。ちゃんとわかってくれたようだね。大事なのは明日、それをわかった上でダンジョンに潜ることだ。今自分にできる最善を尽くして、生きて帰ってくるのが何より重要だ。そのことをちゃんとわかっておいてくれよ」

ダンジョン1階層に降り、探索を開始する。さすがに迷宮、というだけはある。少し広めの洞窟が続ぎ、少し進むと広場のようなどころに出るようだ。ダンジョン内は真つ暗・・・ということはなく、間を開けて松明が灯っている。ありがたいことだ。そしてこのダンジョンの壁、ここからモンスターが生まれるということだが・・・

集中しながらダンジョンの中を進んでいく。手にはすでにナイフを持っており万全だ。すると突然、前方10m先位から、ピキピキ、と

いう音が聞こえた。

・・・来た！モンスターが生まれる音だ。その音を聞くと同時に僕は行動を起こす。

「上昇せよ」「ブースト！」

よし！無事魔法の発動を感じる。出だしは好調だ。少し効率は悪いが、今の僕にはこれが一番安全だ。生まれてきたモンスターを見る。あれはおそらく、エイナさんから教わった、コボルト、ゴブリンと言われているモンスターだろう。習った姿と一致する。大きさはそこまででもない。だが、その姿を見て身体が少しこわばる。地球上じゃ絶対見ない生き物だ。まさしく宇宙人に合ったような感覚である。最初のモンスターが少しとはいえ、人型とは嫌なものだ。

そんな僕のためらいを知ってか知らずか、ゴブリンがこちらに向かって動き出した。

——しまった！先手を許してしまった！本当はこちらから動かなければならなかったのに！

ゴブリンは奇妙な叫び声をあげながらこちらに襲い掛かってくる。

「ひいー」

その恐ろしい姿に僕の足はすくんでしまい、ゴブリンから顔を守るように手を持っていく。その腕にゴブリンは待っていたと言わんばかりに噛みついてきた。

「痛い痛い！この！死ね！死ね！！」

痛みでパニックになりながらも、噛まれていない方の手で持ったナイフでゴブリンの頭を刺す。ナイフから嫌な感覚が伝わってくるが無視する。

三回刺したところでようやくゴブリンは光となって消え、そこには小さな一つの魔石が残っていた。

「はあ、はあ。じよ、冗談じゃないぞ。何だこれ。くそ恐いし、くそ痛い」

思わず悪態をついてしまう。乱れた息がなかなか整わない。鞆からハンカチを取り出し、腕に巻いて止血する。

恐らくダンジョン内で一番弱いであろうモンスターにこの体たら

く。最高に情けない。周りに誰もいなくてよかった。誰かいたらこのまま帰っていたところだろう。魔石を拾い鞆の中に入れ、先ほどの反省をする。

「殺らなきゃ、殺られる」

つまりそういうことだ。先ほどのナイフで刺す感覚が手に残っているが、噛まれた腕に比べれば些細な感覚だ。必要なのは、躊躇わないことだ。相手からの攻撃を許す前にこちらから攻撃する。それが出来なければ、僕は殺される。

エイナさんは、1階層のモンスターなら一般人でも戦えると言っていた。なら、ステイタスを持ち、かつ「ブースト」を使っている僕が負ける道理はない。

平常心を保つために、自分の心にそう言い聞かせながら、僕は迷宮の奥へと足を進めていった。